



# YOROZU 通信 NEWS

Vol. 07

栗原 健一

ニュース 発行 ; 2020 11月号

1、300 問答の建築よろず相談

## 世界遺産-バガン遺跡のパゴダ群

2級建築士だった父の切なる願望に応えて1級建築士資格を取得し、45年前に54歳で早死にしたその父の建築士事務所を継いだ。ビルマ戦線生き残りの父は、現地でお世話になったビルマの方々との交流を後世に引き継ごうと結成された日緬交流団体（現在の（一社）日本ミャンマー友好協会でも私も会員）のメンバーであり、戦後何回も戦友たちとビルマ慰霊訪問を重ねた。先ごろ、NHKの朝ドラでもインパール作戦の悲惨な戦場での描写があったが、多くの戦死者が出た激戦地だったようだ。

父の思い入れが強いビルマだが、どんなところなのか一度行ってみようかと父が自ら企画したツアーに私も参加することにして矢先の1976年8月に、父は脳出血で急死した。そんなに気に入ったビルマならと分骨をもって現地に向かった。そして、バガン遺跡に巡り合った。

戦場になることが少なく父の話には出なかったバガン遺跡だが、そこに初めて足を踏み入れた私はその壮大で荘厳な圧倒的な数（3000基と言われる）の大小の仏塔（パゴダ）の林立する遺跡に圧倒された。

ある意味で夢に出てくる理想郷のデジャブだった。有名なパゴダは別にしてその他の遺跡は崩れかけ、名前もなく番号付けされている廃墟のようなものも多かった。

しかし、私にとって、その廃墟感に惹かれた。今では、安全上の理由で仏塔に上ることは禁止されているが、当時は、相当に大きな仏塔でも人影はなく、出入りは自由で上層に上がる内部の階段通路を自分で見つけ、そこから上部のテラスに出ることができた。まるで、探検だった。登ったテラスからは林の中に点在する他の大小のパゴダの景観を独り占めにできた。

このバガン遺跡は、約1000年前のパガン王朝時代に作られた。熱心な仏教徒であるビルマの人々は来世での幸せを確立させるために今でも功德をつむことに熱心だ。そんな仏教心にあふれた王族・貴族たちが功德を積むために次々と仏塔を寄進した。およそ200年のあいだに3000基にまで達したのだろう。それが、私が訪問した当時まで、なんとか壊れながらも保存されていたのだ。現在はユネスコなどの支援で修復作業が進められているが、正直言ってヘタな修復は遺跡感を損ない、絵にならないことが多い。異邦人の私にとって、どうしても「遺跡」として見てしまうが、現地の人々にとっては、あくまで仏教の対象であり、常に新しくなくてはならない。ヤンゴンのパゴダでは仏像の「後背」にLED照明を使ったものが多い。この二つの要素のバランスが難しいだろう。

世界三大仏教遺跡の一つなのに日本人はあまり知らない。建築家なら、特に興味は持ってほしいし、遺跡保存・計測などで協力もしてほしい。日本ではあまり知られてなくても欧米人にとってはアジアの神秘で観光客も多い。だから、アジアの片隅の小さな村の人々は結構国際人で、英国の植民地だったこともあり英語ができる若い学生は日本よりはるかに多い。そんな村人との交流も楽しく、facebookで交信している。

貴重な仏陀の遺骨をビルマから寄贈された宗教法人の依頼で日本にビルマ風の寺院を建立しようとした計画（結局は頓挫）があり、20年ほど前から私とその設計に携わることになった。現地での実測調査などで6回ほど訪問した私は、それ以降も一昨年末まで都合14回バガンに訪問し、学生のころからフィルムカメラNikon Fを愛用していた写真好きの私は遺跡を撮りまくった。

代表的、もしくは気に入った31基のパゴダの写真を網羅した専用サイト

(<https://bagan-pagoda.com/>)を今年立ち上げた。これはライフワークとなり、現在コロナ禍でバガンに行けないが、まだ追加したく、ミャンマーへの渡航が解禁されるのを心待ちにしている昨今である。※写真は現地の美人をモデルに一般観光客がくることのない「669番」パゴダ前で。